退渓学を形成するもの（Ⅰ）

――『朱子書節要』の史的地位――

望月　高明

あらまし　嘉靖癸卯（一五四三年）に生起した『朱子文集』との遭遇という出来事は、李退渓にとって一つの事件であった。このことは彼の爾後の生涯がその出来事の展開の過程という意味をほとんど不可避的に帯びざるを得ないことを結果した。こうして十数年にわたる深い学識と熱情を傾けて成ったのが『朱子書節要』であった。同書の成立は、癸卯に生起した『朱子文集』との遭遇という出来事が胎んでいる意味の退渓自身による論理化という象面を避けることができない。小論は直接には『朱子書節要』に附載する「朱子書節要序」及び「附退渓李先生答李仲久書」の二つの述作を取り来たって、退渓の学を形成する一つのモメント（固より有力な）として、『朱子書節要』に注目してその跡を探ろうとした。また、『朱子書節要』編纂に象徴される退渓学の成立は、科挙と結合して俗流化した朱子学と訣別して、朱子の原書に直接就いて、朱子の原意に還ることを標榜した思想運動として位置付けることが可能である。小論はかかる象面についても考察を怠らなかった。

一

曩に私は「退渓学を形成するもの（Ⅰ）――『心経附註』の史的地位――」（以下、前稿と称する）なる小論において、およそ次のように述べた。すなわち、李退渓（一五〇一～一五七〇）はその生涯において、その時々の機縁に応じて多くの序・跋・記等の文を書いているが、その中には彼が自己の学問を構成する上で決定的な影響を被った退渓学形成過程において大きな地歩を占めている文献が交じっている。例えば「延平答問跋」（『退渓文集』四十三）、「朱子書節要序」（同四十二）、「心経後論」（同四十一）と列挙したとき、宋明の性理学史にその地歩を占めている当該の書たる『延平答問』『朱子文集』『心経附註』が、ともに退渓の学を構成する上においていかに重要なモメントを成しているかについては、改めて喋々を要しない。一つの大きな人格に向かって尋常でない迫り方をしようという以上、どこかそこに同質的な力の独自の共感があり、あるいは異質的な反撥から生ずる強力な発光があるべきだという（大山定一氏の言葉）。そして、上にあげた退渓の三つの述作の調子の高い文章には、いずれもそういう精神の燃焼を見出すことができる（なお、その叙述はひとまず小論の序文としても有効だと考えられるので再録した）。わけても嘉靖癸卯（嘉靖二十二年（一五四三）、読者はこの年号を記憶に止どめていただきたい）に生起した『朱子文集』との遭遇という出来事は、退渓にとって一つの事件であった。彼の生と学を考える場合、四十三歳の時に生起した『朱子文集』との遭遇は、自己の根源的転換の自覚としての「回心」の体験にも比すべき心霊上の出来事であると言わなければならない。このことは退渓の爾後の生涯がその遭遇という出来事の展開の過程という意味をほとんど不可避的に帯びざるを得ないことを結果した。そして事実、その生涯とは紛れもなく『朱子文集』との遭遇を機縁としてインスパイヤー（退渓のいわゆる「感発而興起」「発端興起」――ともに「朱子書節要序」の表現）せられた者が、朱子という一つの大きな人格に向かって尋常でない迫り方をした時に生ずる

同質的な独自の共感によって縁取られたものであった。この事実は後述するごとく、壮年の時に『朱子文集』によって一衝せられた情動が一時的なものに止どまらないで、その生涯にわたって真摯な努力によって把持され、反復され続けられたことを物語っている。そして、かかる象面こそ退渓の生を諸他の生から区別する徴表であることを指摘したいと思う。こうして十数年にわたる学問的熱情を傾けて成ったのが『朱子書節要』二十巻である。その意味においては、『朱子書節要』は退渓が編纂したものであるという命題はもちろん正しい。しかし、些か語弊があることを承知して言えば、私は『朱子書節要』の成立は、編纂という単に文献学的な、あるいは技術論的な次元における問題として限定、もしくは矮小化して捉えてはならないと思う。もっとも、一口に文献学的な、あるいは技術論的な次元における問題と言っても、『朱子書節要』に対する主体の問題意識の深浅濃淡、意識の構造いかん、あるいはアプローチの仕方に応じて、様々な位相において理解の種別が成立するであろう。その中でも例えば朱子自身の所論について未定説と定説とを区別した理由、『朱子書節要』を編纂する過程で、朱子の膨大な書簡から何を基準として選び出したか、なぜ経書の特定の章、あるいは存養・克己・未発已発等の特定のカテゴリーの解明に集中したか、その他……等々の問題は、最も中心的な論題を構成するであろう。従って、これらの問題の解明を抜きにしては、恐らく『朱子書節要』の内容というのは果たしてどれだけの思想が残存し得るかは、非常に疑問であるといわねばならない。しかしそれにもかかわらず、そういう文献学的な、あるいは技術論的な次元における問題以上に、それの精神的な意味[1]ということが改めて問われなければならない。私はこのことを力一杯主張したいと思う。『朱子書節要』の成立は、癸卯に生起した『朱子文集』との遭遇という出来事の展開の最後的な帰結、その結晶化という意味を端的に担っている。それとともに、同書の成立は『朱子文集』との遭遇という出来事が胎んでいる意味の退渓自身による論理化という象面も見逃すことができない。「論理化」と言ったが、この場合直ちに問題になるのは、その他のやり方ではなくて、なぜ方法的に『朱子文集』の縮約という手法が選ばれたかということである。退渓は『朱子書節要』編纂の動機に触れて、「此の書当初、四方と之を共にすることを期せず。只だ老境精力短乏の為めに、此の節約の功を須ちて、以て自ら省覧に便するのみ」（『退渓文集』十、答李仲久）と述べている。しかし、その言はいわばその動機について精々二次的な理由を語っているというにすぎず、その機微に触れたものとはいい難い。それはわれわれの問いに対して何も語っていないのに等しい。であるから、『朱子書節要』の成立が『朱子文集』との遭遇という出来事が胎んでいる意味の論理化であると言った時、『朱子文集』の縮約という手法がなぜ方法的に取られたかということは、依然として問題でなければならない。

退渓の「朱子書節要序」は、その年次によれば嘉靖戊午、すなわち嘉靖三十七年（一五五八）に成った。（なお、高弟の柳成竜の『退渓年譜』では『朱子書節要』の成立を嘉靖三十五年に繫けていて、両者の成立には二年ほどのタイムラグがある）。時に退渓五十八歳。しかし、後述するごとく同序は彼の生前中には遂に公開されることはなく、その死後に手ずから浄写した成稿が筐底から発見せられた。（なお、高弟の奇高峰は同序に附された識語において、退渓のかかる挙を「微意」と形容しているが、その思想的な含蓄については後に主題的に論ずるであろう）。もっとも、『朱子書節要』の祖本としての地位を占める『星州印晦菴書節要』に附載する高弟の黄錦渓（一五一七～一五六三）の跋文（星州印晦菴書跋）と、退渓の序文とを比較すると、両文はその基調意識においても、またその用語・文面等においても非常に類似したところが多い。因みに錦渓の跋文には「嘉靖辛酉（四十年）五月」の年次が附してあるから、その成立は退渓の序の方が三年ほど早い。このことは錦渓が跋文を執筆する過程で、退渓の序を参照する便宜を持っていたか、あるいは同序の内容に係る話題を直接退渓から聴く機会を持っていたことを窺わせる（そして事実、このことは退渓の書簡などによって資料的に裏付けることが可能である）。上来、退渓が『朱子文集』との遭遇を機縁としてインスパイヤーせられたことについては既に指摘した（もっとも、このことが本当の意味で明らかになるためには、われわれは「朱子書節要

序」の検討を待たなくてはならないのであるが）。また、後来の叙述それ自身が明らかにするごとく、錦渓もまた退渓を介して『朱子文集』にインスパイヤーせられた人であった。そして、最も単純化して言えば、彼の「星州印晦菴書節要跋」はこの単純な事実を告白したものに他ならない。この事実は、退渓を領袖とする退渓学派というのは、『朱子文集』によってインスパイヤーせられたところの熱を恰も火花から火花へと移っていくように、師から弟子へ、実存から実存へと最も直接的に「間接伝達」していったところの学統であることを示唆している。そして、その師から弟子への「間接伝達」の跡をよく示しているのが錦渓の「星州印晦菴書節要跋」であると考えられる。事態かくのごとくであることから、小論では初めの方針を些か変更して「朱子書節要序」を理解する上において、その缺を補う有力な資料として錦渓の跋文を主題的に検討することにした。この作業過程を通して、『朱子文集』を媒介とする退渓門下における学問継承の一形態が明らかになることを期するものである。（もっとも、錦渓は嘉靖四十二年（一五六三）に退渓に先んじて没している（退渓は錦渓のために「星州牧使黄公行状」（『退渓文集』四十八）を撰している）。この事実は『朱子文集』を媒介とする退渓門下における学問継承の一形態といっても、少なくとも退渓→錦渓の系列においてはその展開は極めて限定的なものに止どまらざるを得なかったことを物語っている）。なお、このように退渓の序と錦渓の跋とにはその基調意識は固より、その用語・文面等においても非常に類似したところが多いにもかかわらず、両文にはある重大な点において判然と懸隔が認められる。しかし、その差異は非常に本質的である。そして、思想的にはむしろその差異の究明こそ一層重要であるといわなければならない。小論ではかかる象面についても考察を怠らないつもりである。

なお、凡例的なことを記しておくと、小論の定本には楠本正継先生旧蔵に係る大塚退野朱批本『朱子書節要』二十巻（『日本刻本李退渓全集』（上）所収）を用いた。その理由の一斑については既に小論の「序論」[2]において少しく述べておいた。

二

晦菴朱夫子亜聖の資を挺し、河洛の統を承け、道巍くして徳尊く、業広くして功崇し。其の経伝の旨を発揮して、以て幸いにして天下後世を教うる者、既に皆な諸(これ)を鬼神に質して疑い無く、百世以て聖人を俟ちて惑わず。（朱子書節要序―Ⅰ、以下、「節要序」と略記す）

人は「朱子書節要序」の劈頭が、朱子の人格と学問に対する讃嘆の言によって埋められているのを見て、例によって陳腐な朱子学者の「わが仏尊し」とする底の退屈なお決まりの枕ぐらいにしか思わないかも知れない。しかし、それはそうではない。また、それは退渓が朱子学の徒であるから、然く讃嘆の言によって荘厳せられていると解するのも、やはり皮相の謗りを免れ難い。同序の劈頭が中国近世思想史において占める朱子の鬱然たる地位、あるいはその人格と学問に対する讃嘆の叙述でもって始められているのは、決して偶然ではない。因みにこのことは同序を貫いている基調意識を理解することなしには、十分には明らかにならない。そして、その基調意識が退渓の体験と固く結び付いたものであることは、この場合注意を要する。それ故、それが退渓の体験の事実であることが見失われたような場合、いかにも深みを欠いた平板な事実を語ったものとして受け止められるのも、決して故なしとしない。しからば、「朱子書節要序」を貫いている基調意識とは何であるか。すなわち、退渓が『朱子文集』と遭遇することを機縁としてインスパイヤー（退渓のいわゆる「感発而興起」「発端興起」）せられたという事実、これである。（因みに「朱子書節要序」には二つの異なった基調意識の流れが認められるのであるが、その両者が錯綜することによって同序をいかなる底の性格のものに織り成しているかということの究明は、後来の叙述が明らかにするであろう）。『朱子文集』との遭遇が退渓に新しい精神的次元を開いたことはほとんど争えない（もっとも、かく言った場合、それが退渓にいかなる展望を開示したかということが明らかにせられなければならないけれど）。それは退渓の学がその展開の全過程を終えた最後

の地平から振り返ったとき、その時点（遭遇の現在）において既にその学の全過程を潜勢的に開示している、彼の『朱子文集』との遭遇とは、そういう底の出来事であった。「朱子書節要序」には『朱子文集』との遭遇を機縁として生起したこの事実に対する身心を打ち震わす劇しきパトスが全体に漲っている。表面から見て直接それを取り上げていないものも、根本においてこのモチーフによって貫かれている。しかし、事はそれだけに止どまらない。退渓は『朱子文集』との遭遇という出来事が胎んでいる意味を、その後十数年にわたる深い学識と熱情を傾けて『朱子書節要』に結実させた（なお、このことが孕んでいる問題については曩に指摘した）。『朱子書節要』の成立は、一方において退渓が東アジア世界における朱子学の展開史において確固不動の地位を確立したことを意味している。後述するごとく『朱子書節要』編纂に象徴される退渓学の成立は、科挙と結合して俗学と化した朱子学と訣別して、朱子の原書に直接就いて、朱子の原意に還ることを標榜した思想運動として位置づけることが可能である。このことは更に朱子以後の近世儒学思想史の中で退渓学の特色を考える場合、極めて重大な手掛かりを与えてくれるものである。例えば大塚退野の次の言説などは、退渓の朱子学者としての史的地位が単に朝鮮一国に止どまらないで、東アジア世界における朱子学の展開史の上に定位せられなければならないことを語っている。すなわち、

自省録一看仕候。久々ニ而よみ申候。ますます退渓之学之至不可測と奉存候。此人なくんば紫陽之微意不明して、俗学となりおわり候半と奉存候。（『孚斎存稿』下、贈中瀬某）

（もっとも、ここに直接名前のあがっているのは『自省録』であって、『朱子書節要』ではないというかも知れない。しかし、そのように限定して考える必要はあるまい）。このように、朱子の文献の理解、解釈によって既に覚醒に導かれ、全く新しい精神的次元を開かれたような場合、そのことを直接経験し来たった主体にとって、朱子の人格が諸他の通常の教師以上の絶対的な意義を担っていることは、蓋し当然でなければならない。上の「朱子書節要序」の劈頭の文は、かかる脈絡に定位したとき初めてその意味が明らかになるであろう。

夫子既に没して、二王氏及び余氏、夫子平日著す所の詩文の類を裒粹して一書と為し、之を名づけて朱子大全と曰う。総て若干巻にして、其の中公卿大夫門人知旧と往還する所の書札、多くは四十有八巻に至る。（節要序―Ⅱ）

『朱子大全』の成立について、ここで主題的に論ずることはできない。その成立の書誌学的・文献学的な問題等については、それに関説した他の論著に委ね、ここでは上の文が明らかになる範囲で満足するとしよう。なお、『朱子大全』は正しくは『晦庵先生朱文公文集』と称する（小論では既にそうしているように、通称に従って『朱子文集』と称する）。岡田武彦先生によれば、大全集の称は明の中葉以後に起こったらしい。この称は天順四年（一四六〇）の胡緝序刊本に初めて見えるが、これは明の永楽年中に『五経大全』『四書大全』『性理大全』という、いわゆる大全本が出版せられた影響であるという（「晦庵先生朱文公文集解題」）。『朱子文集』の中で最も精善なものといわれる嘉靖刊本（四部叢刊本及び和刻本）の構成は、正集百巻・続集十一巻・別集十巻の併せて百二十一巻から成る。二王氏は王埜と王遂、余氏は余師魯のこと。『朱子文集』正集百巻の編集は朱在（朱子の三男）に係るが、嘉熙三年（一二三九）、建安において百巻本として刊行したのは王埜に係る（閩本）。続集十一巻の中、十巻を淳祐五年（一二四五）、やはり建安において刊行したのが王遂。続集附一巻を淳祐十年、建安において刊行したのが徐幾。別集十巻は余師魯編、咸淳元年（一二六五）に建安において黄鏞が序文を附して刊行。『朱子文集』には朱子の撰した若年より晩年に至るまでの詩・封事・奏劄・奏状・申請・辞免・書・雑著・序・記・跋・祭文・墓表・墓誌銘・行状・公移などを分類してほぼ年次順に収録している。朱子の著述関連の資料の中で『朱子文集』に匹敵する規模を有する浩瀚な資料としては、『朱子語類』一四〇巻が存する。同書は師弟子間の問答の筆録であって、形成過程における朱子思想を見るために

はこの上ない材料を提供する。もっとも、『朱子語類』が師弟子間の問答の筆録であるといっても、それは朱子の思想を分節して仮に問答体に仕組んだいわゆる教理問答のごときものに尽きるのでないことは固よりである。それは時としては弟子との対話を介して、朱子の思想が今まさに紡ぎ出されようとする当の現場であったりもする。問答は飽くまで問答の現在的現場における出来事として見られなければならない。通常対話が成立するためには両者の間に共通の話題、共通の関心が前提されるが、それは常に人間と人間との直接関係である。問答の現場においては対話は単に口頭上の関係ではなく、身心一如の全体をあげての全身的関係である。対話における言葉は語勢や身振り手振り、あるいは目付きや態度から切り離すことができず、このような全身での相互の響き合いの中で言葉の意味及び理解が具体的に決められていく。このように本来対話が単に言葉によっては尽くされない全身的な関係である以上、それを文字によって再構成しようとする試みが初めからいかに大なる困難を胎んでいるかは、ほとんど想像に余るものがある。まして、それらの筆録は師の示教を記録する主体（弟子）の能力や問題意識、あるいは造詣の浅深に応じてなされるのを避けられないから、時として師教の本旨を十分に伝え得ず、甚だしい場合には全く誤解して記録することすらなしとしない。これ退渓が語録を取り扱う上での問題点について、「夫れ程朱の語録、固より未だ時に差誤あるを免れず。乃ち辞説の鋪演、義理の肯綮の処に在り。記者の識見に未だ到らざるところ有り、或いは其の本旨を失する者之れ有り」（『退渓文集』十六、答奇明彦）と指摘する所以である。（なお、『朱子語類』が師弟子間の問答の筆録であるという事実に徴するとき、一般に対話とは人間存在にとってどういう出来事であるかということを考える上で、上田閑照氏著『禅仏教』から示唆を与えられた。また、上の叙述を成すに当たっては同書の表現を用いていることを附記する）。退渓が『朱子語類』に伏在しているそういう資料的な不安定性を慎重に回避して二次的資料に止どめ、直接朱子の自筆である『朱子文集』に依拠しているのは、事態の正しい方向を示すものであろう。わけても、退渓が『朱子文集』の中でも四十八巻と最も浩瀚な書簡類に注目しているのは、彼の着眼ないしは関心が那辺に存しているかを示すものとして、やはり注目しなければならない。なお、彼が『朱子文集』の書簡類の巻数を「四十有八巻」としていることについては、後に改めて考証するであろう。

然れども此の書の東方に行わるること、絶えて無くして僅かに有り。故に士の見るを得る者蓋し寡し。嘉靖癸卯中、我が中宗大王、書館に命じて印出頒行せしむ。臣滉是に於いて始めて是の書有るを知りて之を求め得たるも、猶お未だ其の何等の書たるかを知らざりしなり。病に因りて官を罷め、載せて渓上に帰り、日に門を閉じ静居して之を読むことを得たり。是れより漸く其の言の味有り、其の義の窮まり無きを覚ゆ。而して書札に於いて尤も感ずる所有り。（節要序―Ⅲ）

劈頭の叙述は、『朱子文集』の流布が嘉靖癸卯の刊行を待つまで朝鮮において極めて限定的に止どまったという単なる事実判断を語るものとのみ捉えてはなるまい（われわれは退渓のこの言説を紙背に徹して読まなければならない）。恐らくわずか二十字余りのこの言説は、『朱子文集』の流通の範囲の地域・時域的限定を語っている以上に、退渓を囲繞している十六世紀朝鮮の学問環境を圧縮して示しているものと思われる。すなわち、一言もってこれを覆えば、朱子学末流の弊害という滔々たる現実、これである。（なお、上の叙述に忠実であろうとすれば、直接には十六世紀朝鮮の朱子学末流の弊害に関説した退渓の言説か、あるいはそれに関説した他の学者の言説を示す必要があるだろう。しかし、以下の叙述では直接には明代初期にようやく顕著になった朱子学末流に係る資料を示すこととする。かくする所以についてはその後の叙述が明らかにするであろう）。朱子学末流の弊害と言ったとき、私は反射的に想起する文言がある。すなわち、元における陸学者として最も大なる者呉草廬（一二四九～一三三三）の「尊徳性道問学斎記」の「嘉定以後朱門末学之弊」という表現である（『呉文正公全集』二十二）。嘉定は元年が西紀一二〇八年。ここでこの文に立ち入って検討を加えることはでき

ないけれど、劈頭の「天の人を生ずる所以、人の人たる所以は、此の徳性を以てなり」という表現は、この斎記の根本的基調を一言の下に道破している。その立場は言語文字の弊を離れ得ぬ朱門末学の弊を救おうとして、徳性を尊び、本体を指示することを主張したもの。であるから、草廬が朱子は既に世儒の記誦詞章をば俗学となしたが、訓詁の精、講説の密に止どまること、陳北渓・饒双峰のごときは、かの記誦詞章の俗学と実際には異ならないとしたのはその立場からは当然である。因みに朱子が没したのは慶元六年（一二〇〇）であるから、「朱門末学の弊」という朱子学の訓詁学化・支離外馳を結果する事態というのは、朱子の没後直ちに惹起したことを意味している。そして、かかる趨勢を助長した張本として朱子の門人中で最も概念的・分析的思弁に長じていた北渓が槍玉にあがっている。（双峰は朱門の高弟の黄勉斎の伝に属していて、草廬は双峰再伝の弟子であるから、この語はかえって矛を操って室に入るの概がある）。なお、われわれの文脈に即して言えば、後に明の人程篁墩（一四四五～一四九九？）がその『心経附註』巻四に「尊徳性道問学斎記」を載せていて（この一事は草廬と篁墩の間に一系の思想的血脈を比定し得る有力な徴証となる）、退渓の注意を喚起したことの方が一層興味深い問題を織り成す。すなわち、彼は朱子の後継真西山の原本に篁墩が先賢の語を附した『心経附註』の愛読者であった。否、単なる愛読者というに止どまらないで、『心経』成立以後、退渓以上に深い関心と敬意を同書に対して払った学者は、同書の故郷中国においても見出し難い。「心経後論」の「許魯斎嘗て曰く、吾の小学に於ける、之を敬すること神明の如く、之を尊ぶこと父母の如しと。愚の心経に於けるも亦た云わん」という深い敬虔の支配している文は、退渓において『心経附註』の占めている地位を遺憾なく語っている。

ところで、「尊徳性道問学斎記」の後に附されたやや長文の按語こそは、『心経附註』の立場を述作の高い調子で最も集中して語るものである。同時にそれは朱子没後三〇〇年後に生を享けた篁墩が目の当たりにした明初の思想的現実に他ならなかった。

学者の弊は、心を簡捷に馳せて、蕩して異学の空虚と為るに非ざれば、則ち意を鑽研に極めて、流れて俗学の卑陋と為る。先哲の時に在りて已に然り。而るを況んや此れに後るること三百年の久しきをや。（中略）学者此に於いて心を痛ましめ骨に刻みて、朱子を以て師と為し、敬を以て道に入るの要と為し、放心を求め、徳性を尊んで、之を輔くるに学問を以てし、之に先んずるに力行を以てし、之を堅くするに持守を以てし、空虚なる者をして反って平実に就かしめ、卑近なる者をして高明に上達せしむれば、則ち聖門の全体大用の学、或いは庶幾からん。而して此の経の摭う所も、亦た空言と為らざらん。（『心経附註』四）

ここに「学者の弊」として剔抉せられている二つの立場の中、前者の「心を簡捷に馳せて、蕩して異学の空虚と為る」というのは、直接には楊慈湖一派の学によって代表される象山学の末流を指している。一方、後者の「意を鑽研に極めて、流れて俗学の卑陋と為る」というのが、曩の北渓及び双峰一派によって代表される朱子学末流を指しているのは固よりである。そして、『心経附註』の立場が右の二つの立場を不満としてこれを止揚しようと企図したものであることは言を待たない。なお、草廬の「尊徳性道問学斎記」では二つの立場の中、直接には後者を論難の対象とするに止どまって、前者についてはひとまず言及していない。これは『心経附註』が「尊徳性道問学斎記」の立場を受け継ぎながら、一段の自覚の深まりを示すものといえよう。また、「先哲の時に在りて已に然り。而るを況んや此れに後るること三百年の久しきをや」という表現は、「朱門末学の弊」が朱子没後直ちに惹起したように、「心を簡捷に馳せて、蕩して異学の空虚と為る」象山学末流の弊も同様に、陸象山（一一三九～一一九二）没後直ちに生起したことを示唆している。この事実は例えば陳清瀾の次の言などに徴しても、その消息を窺うことができるであろう。それは朱子を画期として、それ以前と以後とにおいて思想上の景観（論争主題）が著しく異なって見えるということの指摘に他ならない。すなわち、

朱子の未だ出でざる以前は、天下の学者、儒仏異同の弁有り。朱子既に没するの後は、又た転じて朱陸異同の弁と為る。此れ聖学の顕晦の

由りて繋かる所、世道升降の大幾なり。（『学蔀通弁』提綱）

清瀾によれば儒教と仏教、わけても禅仏教との対決という思想的課題は、朱子の登場によってひとまずその論争に終止符が打たれ、後者の「弥いよ理に近くして大いに真を乱る」（中序章句序）という異端性は白日の下に曝された。しかるに、朱子没後の思想界にそれに取って代わるように「朱陸異同の弁」が新たな思想的課題としてクローズアップされるに至ったという指摘は、われわれの予想を裏付けるものでなくてはならない。かくして、両学の習合折衷の試みは朱陸両学の「末学の弊」という滔々たる歴史的潮流に棹差しながら、それを克服する運動として自ずと醸成されるに至った。そして一層重要なことは、朱子と象山という宋代の精神を代表する二人の巨頭が没して三百年後の現在においては、かかる情況は一層増幅されて混迷の度を深めているという指摘である。例えば篁墩の次の言を見てみよう。

其の宋末元盛の時に在りて、学者六経四書に於いて、纂訂編綴して集義と曰い、附録と曰い、纂疏と曰い、集成と曰い、講義と曰い、通考と曰い、発明と曰い、紀聞と曰い、管窺と曰い、輯釈と曰い、章図と曰い、口義と曰い、通旨と曰う。棼起蝟興して数計すべからず。六経の註脚は、抑そも又た之に倍せり。（『篁墩文集』五十五、答汪僉憲書）

篁墩がここで指摘している四書に係る乾燥無味な注釈書の堆積という事態（彼は上の文の末尾で、六経の注釈書に至っては四書のそれに倍すると言っている）は、二つの立場の中、ひとまず「朱門末学の弊」の宋末元盛時における情況である。上の文に続けて彼はこう言う。

今、朱子を去ること三百年、人ごとに其の書を誦し、家ごとに其の業を伝う。顧って未だ小学追補の功有らずして、又た記誦詞章の工拙を以て、学問の浅深と為す。晩宋盛元の諸儒に視ぶるに、更に其の下に出ず。（同上）

既に宋末元盛時における四書（及び五経）に係る乾燥無味な注釈書の堆積という事態を指摘した後に、篁墩が朱子没後三〇〇年後の現在の学者を取り来たって「晩宋盛元の諸儒に視ぶるに、更に其の下に出ず」と評した時、かかる事態がどれほど朱子学の原姿から隔たった、学問的に頽落したドラスティックな現実を直指しているかは、ほとんど想像を絶するものがある。なお、明における朱陸折衷論者として最も大なる者篁墩が、朱子とその郷（新安―安徽省婺源県の古名）を同じくし、その遺教に服している事実を指摘しておくことは、この場合意味なしとしないであろう。すなわち、「僕朱子の郷に生まれ、其の遺教に服す。克く少くして立つこと有るは、実に罔極の恩有り」（同五十四、復司馬通伯憲副書）。私は曩に明らかにした前稿（Ⅲ）において篁墩の右按語を取り来たって、次のように述べた。「篁墩のこの文は、「朱陸早異晩同」説を暗暗裡に標榜するという『心経附註』全体の脈絡から切り離して、それだけを取り出したとき（固よりかかる試みは不可能であり、実際問題としてはナンセンスであるとしか言いようがないが）、それが朱子学の原姿を、あるいは朱子学の最も本質的傾向の当然なる展開相を端的に表示するものとして、退渓の心を激しく揺さぶらなかったであろうか。……」。

われわれは更にこの文の後に続けるとしよう。しかし、思えば退渓は篁墩その人ではない。たとえ退渓が『心経附註』の中に、わけてもその按語に自己に先駆して時代の病弊が犀利に剔抉せられていること、時代の課題が鋭敏に洞見せられていること、あるいは学者としての自分の針路が真摯に提示せられていること……等々を読み取ったとしても、それが直ちに退渓自身の課題であることを意味しない。まして、それの止揚なのではなおさらない。退渓が現在の自己を囲繞している時代の様々な問題に真摯に対面すればするほど、この単純な事実（退渓は篁墩その人ではない）は必ずや彼自身に問題の独自の解決の途を求めさせずには措かない。否、かかる言表は退渓の事態に即したものとはいい難い。むしろ、退渓は『心経附註』の提示した問題に愚直なまでに固執し、それを自己の課題として繰り返し反芻したと言うべきである。このことは、彼が一生涯にわたって宛ら神明父母に対するがごとく『心経附註』を尊信し続けた事実を指摘すれば、思い半ばに過ぎるものがある。しかし、かく言うことは退渓の立場に『心経附註』の立揚を溢出するもの、その限界を止揚するところがあることを直ちに否定するものではない。そし

て、退渓の立揚にそういうところが見出し得るとしたならば、それは彼が『心経附註』の提示した問題にどこまでも固執し続けたところに開かれてきたものに他ならない。徹頭徹尾『心経附註』の立場に固執することが、結果的にそれの限界を止揚するに至るという、徹底即止揚という構造がそこには見出すことができる。このことは『心経附註』の中国近世思想史において占める過渡的な地位を指摘すれば、容易に理解することができるであろう。篁墩は朱陸論争史において朱陸調和論者（その尤なる者）と位置づけられるが、その『道一編』は宋末から明初にわたるそういう習合折衷の集大成としての地位を担っている。なお、同書は王陽明（～四七二～一五二八）の『朱子晩年定論』に影響を及ぼした痕跡がある。しかし、朱子学的窮理論を超えて教学の原点としての心を立脚点とする陽明が、「致良知」を中核とする新心学の羽翼を整えるのに応じて、かかる立場はいまだ中途的、不徹底なものを残すとして完全に止揚せられるに至った。明代思想史において理学路線より心学路線へと決定的転換の契機となったのは、このように陽明の独自の心学であった。退渓が『心経附註』私淑の徒であるの故をもって、その学に同書の立場を溢出するもの、その限界を突破するところがないと審判し処遇するのは、彼の思想の展開、その史的地位を篁墩的な過渡的な次元に錨付けようとするものであり、思想史の動向から遊離するものといわなければならない。むしろ、私は退渓は陽明の同時代者として（一層正確には退渓は世代的には鄒東廓・銭徳洪・王竜渓等…の陽明門下の錚々たる者との同時代者である）、あるいは朱子学者として陽明及び陽明門下に対抗するに堪える思想的骨骼を擁する思想家であると思う。そして、『朱子書節要』の編纂は『心経附註』が提示した問題（文脈上かく言ったというに止どまって、退渓がその学を形成する上で影響を被ったのは固より同書だけに限らない）を、退渓が自己の境位に即して真摯に受容し、朱子学者としての彼の立場から独特の方法によって止揚を図ったコメンタリーとしての地歩を担っているというのが、われわれの予想である（なお、上来指摘した二、三のことどもは、ひとまず思想的なデッサンとして問題仮設的なものに止どまって、具体的な論証を欠いている。であるから、われわれは行論の過程でこれらのことが明らかになるよう努力しなければならない）。

以上、主として草廬―篁墩の資料を手掛かりにして明代初期にようやく顕著になった朱門末学の弊害（一層正確には朱陸末学の弊害と言うべきであろう）について指摘した。再び本文に立ち返るとしよう。既に「心経後論」がそうであったように、われわれは「朱子書節要序」においても退渓が『朱子文集』との遭遇に多くの紙幅を費やしているのを見出すであろう。退渓の『朱子文集』との遭遇が、後に退渓学として形成せられる彼の学問の性格を占う上においてどれほど決定的な出来事であったかは、改めて喋々を要しない。それにもかかわらず、退渓がこうして『朱子文集』との遭遇に紙幅を費やしていることは、彼にとってこの出来事が率爾でない厳粛な体験であったことを物語るものとして、やはり意義深いことといわなくてはならない。因みに友枝龍太郎博士の考証によると、退渓が初めて触目することを得た朝鮮刻本の『朱子文集』とは、嘉靖十一年（一五一二）再刻の成化修補本であるという。このように「嘉靖癸卯」という表現は、表面上の文意においてはひとまず朝鮮において『朱子文集』が初めて刊行せられた年号を指しているという以上を出ずるものではない。しかし、この嘉靖癸卯という表現には、それによっては尽くされないある含畜が込められているとしなければならない。ある含畜と言ったが、それは二重の意味において退渓の生を画期する象徴的な意味を担うものであった。その一つが、上来述べ来たった癸卯に生起した退渓の『朱子文集』との遭遇という出来事であることは、改めて喋々を要しない。そして、このことが退渓の生にいかなる起伏を刻印したかを究明することが、小論の主題の一つを成している。

しからば、他の一つとは何であるか。私はそのようなものとして、退渓四十三歳の時に生起した「退休」という一事を指摘したいと思う。なお、その語は直接には鄭文峰の文に由来しているので、行論上それを示すこととする。

先生本と宦情少なし。又た時事に大機関有るを見て、癸卯より始めて退休の志を決す。是の時先生蓋し四十三。是れより以後、一意退帰、

累りに召還を被ると雖も、常に朝に久しからず。（『退渓言行録』六、言行通述）

文峰は上の文で退渓に退休を決意せしめた直接の機縁を二つあげている。その一は退渓は生来世利紛華に泊如としていて、出仕に消極的な関心しか示さなかったこと。その二は自ら身を置く当時の中央政界に跋扈していた権力闘争。なお、文峰がわざわざ「是の時先生蓋し四十三」と明記しているのは、四十三という年齢が退渓の生を截然と前後に画することを示すもので、やはり注目しなければならぬ。因みにこのことは一人文峰に止どまらないで、例えば『退渓年譜』（同書は退渓の伝記資料としては最もまとまったもの）の著者にも十分認識せられていた。柳成竜は同年譜において周到に資料を引証して、退渓の生の画期を癸卯に措定している。もっとも、二人の高弟がともに癸卯を師の生の画期としている所以は、遡って退渓の生の中に求められるのであるから、われわれは門人の二次的資料は捨てて、むしろ直接退渓自身の資料に就くに如くはない。

滉の人と為り、亦た異ならずや。滉の身を処する、其れ亦た難きかな。何ぞや。大愚なり、劇病なり、虚名なり、誤恩なり。四者身に叢まりて、掣肘矛盾、互いに相妨奪す。古の人に及ばんと欲すれば、則ち古人に我の似く大愚なるもの無きなり。今の人に同じからんと欲すれば、則ち今人に我の似く劇病なるもの無きなり。虚名を逃れんと欲すれば、則ち虚名毎に相逐う。誤恩を辞せんと欲すれば、則ち誤恩転た益々加わる。大愚を以てして虚名を実たさんと欲すれば、則ち妄作と為る。劇病を以てして誤恩を承けんと欲すれば、則ち耻無しと為す。夫れ耻無きを挾みて以て妄作を行えば、徳に於いて不祥、人に於いて吉に非ず、国に於いて害有り。滉の仕を楽しまず常に身を退くは、豈に他有らんや。凡そ以て四叢の困しむ所、二患の迫る所と為る故のみ。顧だ滉年四十三歳の時より、已に此の意を見得して退を図り、今に至って二十有五年。行孚ならず、誠至らず、尚お上下の信許する所と為らず。其の五進六退の間に於いて、狼狽蹭蹬、去歳今年に至って極まる。蓋し是に至って又た年七十に近し。四叢添うて五叢と作り、誤恩加わって六卿に至り、事益々難し。（『退渓文集』十七、答奇明彦）

惟だ我が聖朝、独り此の事に於いて久しく挙行せず。臣が如きの愚を以てすと雖も、加うるに積病を以てして虚名に困しめられ、君命に迫らる。癸卯より丁卯に至るまで、二十五年の間、凡そ六たび進みて六たび退く。顛倒狼狽、有らざる所無く、以て已むべきが若し。何ぞ図らん一二年来、天を欺くこと益々甚しく、除命益々峻しく、促召愈々厳しく、以て去年の秋に及びて、則ち又た一番顛倒狼狽して来たるを免れず。（同七、乞致仕帰田劄子三）

人間の一生というものは、誕生から死に至るまで、それ自体は継起する時間の連続から成り立っていて、直接的な形においては（即自的には）切れ目というものは存在しない。従って、人間の生涯をある特定の起伏によって画するということは、極めて自覚的な行為であり、それ故に常に作業仮設的な意味を避け難い。そして、このように上の二文にそれぞれ「滉年四十三歳の時より……」、「己卯より……」と明記せられているのは、退渓が四十三歳（同じことであるが癸卯）をもって自己の生を画期するメルクマールと認識していたことを物語っている。この事実は極めて重要である。殊に高峰宛の書簡には退渓が四十三歳より以来、晩年（この時退渓は六十七歳）に至るまで、士大夫＝官僚として常に退休を乞うて出仕を楽しまなかった理由が、実に委曲を尽くして説かれている。その理由は端的に「凡そ以て四叢の困しむ所、二患の迫る所と為る故のみ」という文に集中して表現せられている。なお、「朱子書節要序」では「病に因りて官を罷め」というごとく、退渓が退休の理由を一義的に自己の病気に帰しているのに比べると、同書簡ではその理由が多岐にわたって曲折に富んでいて一層具体的である。ところで、「退休」という同じ事態を論じながら、文峰の叙述が主としてその要因を外部的な事情（もっとも、「先生本と宦情少なし」と言っているのは、それとは反対の結論を導くことも可能だけれど）に求めているのに対して、退渓の叙述は徹頭徹尾、一己内に閉じられた内面の道徳意識への強い傾斜を示しているところに、その特徴を見出すことができる。例えば「四叢」の中、「大愚」と「劇病」の両者がひとまず内部的な要因であることにつ

いては異論はあるまい。しかるに、「虚名」と「誤恩」の両者はなるほど一見すると外部的な要因を思わせるけれど、そこには既に自己の世間的な名声を「虚」と観じ、君恩を「誤」と観ずる退渓の意識が反映せられている。（なお、私が十数年前に慶北大学校退渓研究所に滞在していた時に、同研究所の機関誌「韓国の哲学」第三十号に掲載された「退渓学の基層」なる小論は、退渓において「嘉靖癸卯」という年がいかなる地位を占めているかという特殊な問題を主題的に追求したものである。また、目下のところその結論に加えるに足る新たな知見を得るまでに至っていない。であるから、ひとまず上掲の二文についてはほとんど裸のまま資料を提示するに止どめ、この問題の詳細については直接小論に就いて見られたい）。

それでは、退渓が嘉靖癸卯中に『朱子文集』に遭遇したという事実と、同年に「退休」を決意したという事実との間には明白な因果関係を措定し得るかというと、それは判然としないという他はない。例えば退渓が退休を決意するに至った直接の機縁が、『朱子文集』のどの書簡のどのパラグラフに強くインスパイヤーせられたものであるとか（後にわれわれはそういう典型的なケースとして明儒呉康斎の『伊洛淵源録』との遭遇について論ずる）、あるいは彼には兼ねてから『朱子文集』の節略を編纂するという構想があったが、同書の刊行、更には入手を機縁としてその作業に専念するべく退休を決意をするに至ったとか……というように。しかし上来指摘したごとく、退渓が退休に至る行動の系列と『朱子文集』を入手するに至る行動の系列とは、ひとまず独立していて両者の間に直接の相関関係を見出すことはできない。ただ、「退休」という一事が退渓に『朱子文集』に沈潜する直接の機会を準備したことは疑いない。わけても、『朱子書節要』の成立が後世において担った思想史上の巨大な意味[3]（例えば上引の退野が「此人なくんば紫陽之微意不明して、俗学となりおわり候半と奉存候」と言った事実を思い起こされたい）に思いを致す時、直接その端緒を準備した退渓の「退休」という一事が、もはや世間一般にありふれた一官人の出処進退というには止どまらない、特殊の色調を帯びたものとして、後来その意味を変えてくることはほとんど争えない。もし癸卯に『朱子文集』との遭遇という出来事が生起しなかったならば、退渓の退休という一事も一官人の出処進退という平凡な出来事というに止どまって、ほとんど何の反響も捲き起こさなかったに違いない。『朱子文集』との遭遇によって共鳴箱が備えられて強大な音響を発したのである。かくして、この二つの出来事が退渓の生に錯綜することによって、癸卯という年が彼の生を画期する彫りの深い振幅の大きいものにしたことは争えない。思えばわれわれが存在するということ、現に此処にあって彼処にはないということ、それ自体さえも一つの根源偶然として、運命の暗示する必然性と固く結合している。このことと類比的に言えば、退渓が癸卯に『朱子文集』と遭遇した事実と、同年に退休を決意した事実との間には、独立した二つの系列の単なる同時的符合というには尽きない「偶然――必然性」の構造が比定し得るのではないだろうか。そして、このことは退渓自身の経験の深まりとともに漸を追うて中心的な位置を占め、強く意識せらるるに至った。事態かくのごとくであるから、その年号は新しい生存の次元を選び取った決意の思い出と結びついて、彼の心に長く記憶せられたに違いない。それ故にこうしてわざわざ「嘉靖癸卯」と明記せられたのだと思われる。それは硬い石に彫り付けられこそしなかったけれど、その心はいかにもそうであったに違いない。

もっとも、退渓四十三歳の時に生起した『朱子文集』との遭遇が胎んでいる意味というのは、いまだその時点（遭遇の現在）においては、その面冪を明らかにしていない。そして、その冪が明らかになるためには時が熟さなければならない。退渓において『朱子文集』と遭遇した嘉靖癸卯から、『朱子書節要』の編纂が成った嘉靖丙辰に至る十数年という歳月は、そういう時熟を準備した期間であった。勅命によって再刻された『朱子文集』を初めて入手した往時を回顧して、退渓は「猶お未だ其の何等の書たるかを知らざるなり」と言っているけれど、これは恐らく彼の謙遜の辞にすぎず、額面通りに受け取る必要はあるまい。実際には錦渓が既にそうであったように[1]、退渓もまた諸他の性理学の文献を介して、その書の存在とともに断片的な形で朱門講学の往復の書簡に触れて、

その重要性に気付いていたものと思われる。

ところで、退渓の生において特徴的なことは、『朱子文集』によって一衝せられた情動（すぐ後で述べるように、厳密にはかかる表現は退渓については妥当しないか、さもなければ制限して使用する必要がある）が一時的なものに止どまらないで、その生涯にわたって真摯な努力によって把持され反復され続けられていることである。

滉、数月病中に於いて、晦菴書を看ること一過。其の言懇到痛快、喫緊に人の為めにする処に遇う毎に、未だ嘗て三復省発すること、針の身を劄し、寐の醒を得るが如くあらずんばあらず。益〻日前の学を為むる、浮泛にして親切ならざること、正に程門の所謂靴を隔てて痒みを爬くの病の如きを知る。是くの如くにして何ぞ曾て絲毫の得力の処有らんや。（同二十六、与鄭子中）

所謂心経・節要等の書、此れも亦た頗る其の間に従事し、日用応接、持守体験して、方に是れ真実の用功なり。往往にして覚えず心融神会、得る所有るが若きこと有り。乃ち古人の言、真に我を欺かざるを知る。然る後又た此れより前、此の事に志すこと有りと曰うと雖も、実は未だ嘗て其の堂に造り、其の胾を嚌めざるを知る。亦た衰病の極、屋舎頽敝、来日多きこと無く、恐らく此の一大事を究竟すること能わざるを歎ずるのみ。（同二十七、答鄭子中）

退渓の遺文を検していると、かかる基調の文を幾つも見出すことができるが（なお、二文とも鄭子中に宛てた書簡からの引用であって些かバリエーションに欠ける憾みは否み難いが、飽くまで偶然の結果にすぎない）、その事実は何ごとかを語るものでなければならない。その事実とはキェルケゴールの言表にならって、退渓の生を「成りつつある朱子学者」として理解可能の途を開くことを窺わせることである（固よりそれは途中の論証を一切欠いた結論の先取りを出るものではないけれど。なお、私は近い将来、かかる象面から退渓の生と学を主題的に論じたいと思う）。ここに彼の謙遜と真摯さがある。周知のように、宋学の主体は士大夫である。宋学とは士大夫の学なのであり、士大夫の思想なのである。士大夫の特徴は、何よりもまず知識階級である点に、いいかえれば儒教経典の教養の保持者たる故に、その十全なあり方としては科挙を通過して為政者（官僚）となるべき者と期待されるような、そのような人々の階級である（以上の士大夫の定義は島田虔次氏の諸著書、主としてその『朱子学と陽明学』に基づく）。退渓もまた士大夫＝読書人として、当然のことながら平生学問をもって己が任となし、また世間的にもそのような名を贏ち得ている自分を肯っている。しかし、一身に学問＝儒教的教養（それは同時に道徳能力をも意味する）を荷負するという教学独占意識は常に二重的なものである。そのような二重性は、内面の道徳意識への強い傾斜を示す誠実な士人においては、かかる教学独占の意識が亢進すればするほど、自己自身の中にパラドックスを自覚させずには措かない。自分自身を「学者」（この場合の「学者」とは勝義には読書人のことであるが、ここではわれわれの文脈に定位して「朱子学者」の意に解する）であるとともに、「学者」でないと告白せざるを得ないような二律背反へと自己を追い立てるのである。そして事実、退渓の「益〻日前学を為むる、浮泛にして親切ならざること、正に程門の所謂靴を隔てて痒きを爬くの病の如きを知る」、「然る後又た此れより前、此の事に志すこと有りと曰うと雖も、実は未だ嘗て其の堂に造り、其の胾を嚌めざるを知る」という言表からは、そういう自家撞著を如実に観取し得るであろう。これは学問とか学問することの深い消息をよく表している。

附記　小論を成すに当たって、成均館大学校大東文化研究院の曺蒼録氏には、同大学校附属図書館尊経閣所蔵の朝鮮本『朱子書節要』の貴重図書の閲覧を始め、その他様々な便宜を賜った。記して謝意を申し上げる。

注

（1）「精神的な意味」と言ったが、それはひとまず便宜的にかかる表現を用いたというにすぎず、この語が意図する事態を正確に表現し得ているというのではない。むしろ、率直にいえば適確な表現を見出し得なかったというのが一層事実に近い。従って、その表現においていかなる事態を含意せしめているかということを明らかにすることこ

そ、ここでのわれわれの課題である。

（2）小論には「序論」と称するややまとまった叙述が存するが、主としてそれは小論の方法論に属する問題を扱っている。その文は昨年三月に開催された第一三七回「中哲懇話会」（九州大学）で発表したものである。そういう縁由もあって、同文は「中国哲学論集」39に掲載される予定である。

（3）かく言った場合、直ちに問題になるのは『朱子書節要』の成立が明以後の東アジア世界における朱子学の展開史において、具体的にいかなる思想的な屈折を与えたかという事実問題でなければならない。なお、退渓の教説が日本朱子学に対していかに大きな思想的影響を与えているかを、例えば阿部吉雄博士の『日本朱子学と朝鮮』は教えている。「序論」で指摘したごとく、わが国において退渓の人格に宗教的な情熱をもって傾倒し、自己の学問を形成する上でその教説の影響を強く受けたのは、山崎闇斎とその高足佐藤直方、及びその一派の学者、また熊本実学派の祖大塚退野並びにその学派とであった。このことは、明清の学者の中に退渓の思想的意義を認めてこれを取り上げた痕跡をほとんど見出すことができないのに比べて、極めて対蹠的である。（もっとも、わが国における退渓学の流行にもかかわらず、『朱子書節要』に限っていえば、例えば退野の講友藪慎庵はその「題繕本朱子書節要首」において、「……吾が邦之を栞行すること、茲に年有り。而るに学者多く以て講解に便ならずと為して之を閣せり。殊に知らず撰者の苦心、之が地と為らざることを。哀しいかな」（『慎庵遺稿』六）と述べている。この事実に徴すると、『朱子書節要』の流布にもかかわらず、わが国においても一部の篤学の士を除いてその影響は極めて限定的なものに止どまったといわなければならない）。事態かくのごとくであるから、われわれが「『朱子書節要』の成立が後世において担った思想史上の巨大な意味」と言ったとき、それはかつて自明的なものとして前提されているような、事実としての影響それ自体を指すに止どまらないで、現在においてはなお不可視的な、むしろ可能性としての、あるいは理念としてのそれまでをも包含している。その場合、曩の退野の言説などは、そういうことの可能性に一の根拠を与えるものである。また、この問題について論ずる場合、中国及び日本の思想的情況に関説しながら、『朱子書節要』の故郷である肝心の朝鮮におけるそれの思想的起伏について些かも言及していないのは、何といっても不完全の謗りを免れ難い。退渓以後の朝鮮における朱子学の展開史こそは、『朱子書節要』が後世において担った思想史上の起伏を考察する場合の最も主要な思想的フィールドでなければならない。『朱子書節要』の成立が後世に及ぼした思想的な起伏が、果たしてどれだけの広がりをもっていたかは、恐らく退渓学研究史における一の研究課題たるを失わないであろう。因みに私は退渓を領袖とする退渓学派とは、『朱子書節要』が標榜したところの精神（それが何かということを究明することが、小論の一の課題を成している）を把待し反復し続けたところの思想運動として位置づけることができるのではないかと思う。なお、曩に指摘したごとく、小論では錦渓の「星州印晦菴書節要跋」の検討を通して退渓から錦渓に至るその思想的起伏の一斑を明らかにすることを期する。そのことの退渓学派全体にわたる検討については、課題として今後の研究に待ちたい。

（4）嘗て朱門学を講ずる往復の書の、或いは諸書に見ゆる者を読むに、率ね皆な言近くして指遠く、辞約にして理明らかなり。毎に未だ全集を見ざるを以て恨みと為す。既に大全集を得て之を読めば、則ち地負い海涵すが如く、備さに具わらざること靡し。而して蠡測（れいそく）の末学、徒らに望洋の歎を起こす。（星州印晦菴書節要跋）

（平成二十五年十月一日受理）